

第34回泌尿器科漢方研究会学術集会

会長： 笈善行(香川大学医学部泌尿器科学教室)

会期： 2017/6/17 ~

会場： コクヨホール(東京都)

ワークショップ

座長： 順天堂大学 堀江 重郎
東名古屋病院 岡村 菊夫

基調講演

泌尿器がん治療とがん関連疲労

香川大学医学部 泌尿器科
笈 善行

疲労感とは日常的に経験する漠然とした感覚のため、がんに対する治療経過中に見過ごされやすい。しかし、日本における抗がん薬による副作用に関する患者アンケート調査では、「疲労・倦怠感」が最も多く、70%以上の患者に認められた。抗がん薬の中ではタキサン系抗がん薬、抗生物質系のアドリアマイシン、エピルピシンやプレオマイシン、シスプラチンなどの白金製剤など泌尿器がん治療でよく使用される薬剤は疲労感を伴いやすいことが知られている。また、腎細胞がんで使用されるインターフェロン α やスニチニブなどの分子標的薬、去勢抵抗性前立腺がんに対する新規ホルモン薬でも疲労感が問題になることが多い。ただし、がん関連疲労の場合、腫瘍そのものが疲労感を生じさせることもあり、また、抑うつ感や不安感、不眠、疼痛、嘔気・おう吐、栄養不良、貧血など多くの因子が多次元的に影響しあって疲労感を生じることが多い。そのため、評価が難しい副作用といえる。日本人患者に対する計量学的評価法としては、Cancer Fatigue ScaleやBrief Fatigue Inventoryなどがある。疲労感を強く訴える患者で原因薬剤が特定されても、抗がん治療として奏功している場合などは、簡単に薬剤を中止できないこともあり、対症療法の成否が治療のアウトカムそのものに影響を与えることが少なからずある。また、同程度の抗腫瘍効果が期待できる場合には、副作用のプロファイルによって患者の好みで薬剤選択を行うことも推奨されるようになってきた。

薬剤関連疲労感に関しては、進行腎細胞がんに対する pazopanib の sunitinib に対する非劣性試験 (COMPARZ) や 両薬剤を blind cross-over させた PISCES 試験では、「疲労感」が両薬剤を比較する重要なポイントになったことで注目された。一方、がん治療、特にがん薬物療法中の副作用対策として漢方薬に対する期待感が高まっている。漢方薬の口内炎や下痢に対する効果に関してはすでに定評のあるところであるが、疲労・倦怠感に対しても改善効果が認められたとの臨床報告が蓄積されつつある。

がん化学療法による長期の食思不振に伴う疲労・全身倦怠感、気力の低下などは「気虚」と呼ばれるが、補中益気湯に代表される補気剤が有効とされる。一方、手術に伴う出血や化学療法による骨髄抑制、栄養不良に伴う貧血などは「血虚」と呼ばれ、十全大補湯や人參養榮湯が効果を示すと報告されている。十全大補湯は「気虚」と「血虚」が混在する「気血虚」にも選択されるようだ。このほか、西洋医学ではステロイドが特に終末期のがん患者の疲労感に効果を示すことが多く、適切なタイミングでの投与が終末期がん患者のQOL維持に貢献している。

このように、がん患者にみられる疲労感や倦怠感の軽減を目的とした積極的な医療介入が原疾患に対する治療薬の効果の維持、増強につながることは疑いない。漢方薬もその有力な選択肢であるが、まだ十分にその適応や投与方法が確立されているとはいいがたく、さらなる臨床経験の蓄積と科学的な評価が必要である。